

短編小説 五

土師 猛

「青春時代」

主任電話ですよと、女子社員の中尾さんから声があつて受話器を取った。先日話されていた映画のことですが、今度の日曜日博多シネマにいきませんかとの山口博美さんから電話であつた。次の日曜日は急用が入って会えない旨電話して約束を断わつた。

実は急用などなく、会いたくてたまらないのにお金が無いのであつた。週始めから急な出費とパチンコの負が続き、昼食代にも事欠く状況になつた。給料日を過ぎないと、デート出来そうにない。まだ二十日もある。一人暮らしの寮生活の私は、その夜ベッドの中でこういう時どうしたら良いのだろうかと考えた。今まで私の知っている限り、テレビでも映画でも本でもデートでお金を払っている場面に出会つたことがない。ましてやお金が

無くて、デートを断わる話など読んだり見た記憶は全くない。

次の日曜日日本屋に行つてある本を立読したら、仕事が忙しいなどで会う事を断わるのは、彼女に気がないと思われてしまうと書いてあり私は慌ててしまった。お金が無くて一緒に映画を観に行けない事を話すと嫌われしまいそうな気がする。まだやっと手を握つて歩く間になつたばかりだ。

それから何度も電話があつたが、のらりくらりと返事をした。それでも給料日の次の日曜日やっと会うことが出来た。レストランで食事をしワインを飲んで、博多シネマのラブシートに座つた。酔と暗と香水の勢いで、博美さんの胸に衣服の上から触わり襟首にキスしたが嫌がらなかつた。映画の後に居酒屋で今日まで会えなかつた事情を話し詫たら、笑いながらデートのお金に触れた作品はないのかしら。次から私のアパートに来てよ、子供みたいと言いながら手を握つて来た。